

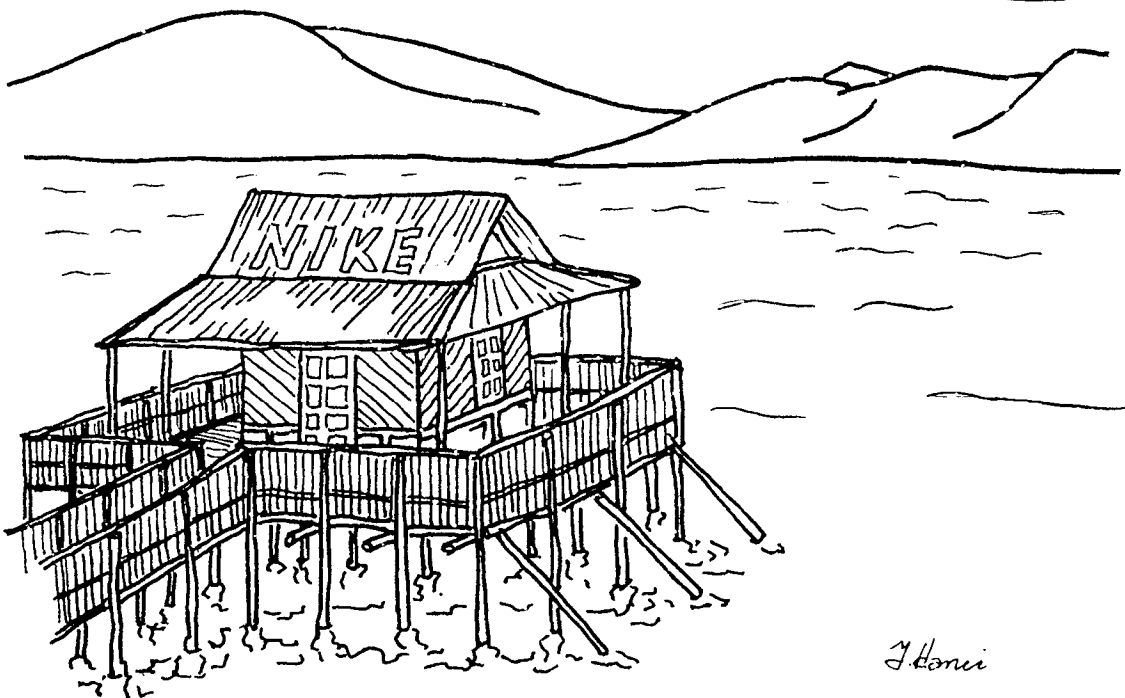
北スラウェシ日本人会  
NOTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第13号



## 目 次

1. 巻頭挨拶	後藤 昭	第 2 頁
2. 北スラウェシ日本人会皆様様	石野	3
3. 最後の慰霊祭御案内	大之木英雄	7
4. インドネシアの思い出	川口 博康	13
5. ミナハサにおけるキリスト教について	青木 次郎	19
6. ミナハサのアチャラ	長崎 節夫	23
7. 帰任報告	長崎 節夫	27
8. 編集後記	編集担当者	30

日本人会の皆様へ

在マカッサル日本国総領事  
後藤 昭

今年も早いもので、1年の前半が過ぎようとしています。在留邦人の皆様にはお変わりないものと拝察しています。

先般、貴地マナドを初めて訪問して、邦人の一部（10名）の方々と懇談できたことは大変良かったと思います。皆様が逞しく生活しておられるのを伺って安心しました。

今回の北スラウェシ州公式訪問では、正・副州知事、州警察本部長等とも意見交換を行いました。その際、在留邦人の皆様に対する種々の配慮につき協力を依頼しておきました。

当地インドネシアにおける一番の気掛かりは、やはり鳥インフルエンザの感染です。鳥フルによる感染死者数は、相変わらずダントツの世界一（現時点で80人）です。やっと重い腰を上げた感のある政府の方針・規則も国民の理解を得られていないのが問題です。幸いにも、北スラウェシ州では、鳥フルの人への感染は今のところ出ていません。これは、州政府と北スラウェシ州住民が一体となって対応しているからだと件の州知事が自負していました。

今回の北スラウェシ訪問では、マナド以外の地を訪問することは出来ませんでしたが、当地マカッサルとは違った印象を持ちました。当地マカッサルよりも、ゆっくりとした時間が流れているとの印象でした。そのことが、昔から日本人のマナド、ビトゥンを含む北スラウェシへの来訪に繋がっているのかなど考えたりもしました。そして、皆様が北スラウェシに住んでおられることの理由の一端が分かったような気がします。

最後になりましたが、在留邦人の皆様が、今年の後半を無事平穏に過ごすことができますように祈っています。

2007年2月記

北スラウェシ日本人会皆様

在東京 石野赫

年が改まりました。本年も宜しくお願い致します。月日の過ぎるのは早いもので、正月とと思っているうちに、もう2月です。それに、ビトン港コンテナ埠頭建設工事が完成し、帰国してから三年が経ちました。「タルシウス」編集者長崎節夫さんの特別なお計らいで、お蔭様で北スラウェシとのご縁は切れず、こうして会報に名を連ねる機会を与えられ感謝している次第です。

ところで、昨年秋東京神田の古本屋街にぶらりと出かけ、古書を漁っていましたところ、偶然昭和53年1月「ジャガタラ日本人会」発行による「ジャガタラ閑話—蘭印時代邦人の足跡」なる稀本に出会いました。早速手に取り、萩原敏夫さんと言う方の巻頭言を読みましたところ、これは再販で、初版は昭和43年秋、故武田重三郎氏の編集によって発刊されたとありました。刊行の辞によればこれは「旧蘭領東印度（現インドネシア）各地に戦前久しく活躍した私共の先輩や同志が近年、寄る年波と共に櫛の歯が欠けるように減少し、その古く多彩な記憶や記録も早晩絶えることをおそれ、急遽有志の間でこれを一冊の本に纏める」こととして発刊せられたものでした。

また、「戦前に於いても日本人の平和的海外発展の理想像と言われた蘭印在留邦人の在り方が今更、業界始め言論界や海外に関心ある方々より見直され、その研究のためジャガタラ閑話の再販が各方面より要望され」再発行に踏み切った、とありました。

戦前にインドネシアへ進出されたいろいろな民間企業の方々56名がこれに寄稿されており、まさしく中味は「約半世紀に亘る現地を回顧し、あらゆる面から邦人の発展の道程、苦心談、秘話、実録、活動状況など執筆を願った物であり、明治の中葉より大正、昭和16年戦争突入まで現地の人と融合し、平和裡に従事した邦人の実史であり、また草分けとして生きた人々の哀史」（同巻頭言より）の綴りでありましたので、貴重な史料になると思い購入した次第です。

読み進む程に、戦前に当地で活躍された「企業戦士」の方々が如何にして現地の人々と共存していくかに普請され、事業を拡大されていったかが文の節々

に伺い知ることができました。戦前、民（みんな）の力で斯様な企業拠点を着々と蘭印各地に築いてこられたのを知り驚きを禁じ得ませんでした。それと同時にあの戦争さえなかったら、との複雑な気持ちにさせられました。

その中で、当時ビトンで活躍されていた大岩さんに触れた一文、永福虎著「南方漁業の思い出」がありましたので、ここに一部転記しご紹介させても貰う事にしました。皆様は既にご存知と思いますが、この「大岩勇」さんのご長男、「富」さんは、ビトンにご健在で、先般の日本人墓地整備の際、いろいろご尽力頂いた次第です。この紙面をお借りして感謝の意を表したいと存じます。

### 「ジャガタラ閑話—蘭印時代邦人の足跡」（再版）

永福 虎 著 「南方漁業の思い出」

ボルネオやセレベスで鯉漁業を経営されていた折田氏や大岩氏（注）が終戦前後に相次いで亡くなられたので、南方漁業について草分け時代を語り得る只一人となったと言う事は、寂しいような気持ちがし、誠に感無量なものがある。

（注）この方は、愛知県出身で、お名前は「大岩勇」さんです。ビトンにて「大岩漁業」を興され、終戦と共に閉鎖となったようです。（石野記）

日本人漁業が南方に渡航した最も古い歴史は、真珠貝採取のため契約移民として濠州（オーストラリア）の木曜島やブルームに渡航した和歌山県人が最初で、其後広島県や愛媛県の漁業者が、比島（フィリピン）へ渡航して、打瀬網漁業と一本釣漁業を試みたが、是等はおおむね失敗に終わった。その後、沖縄県人が、渡航して来てから追込網漁法が始まり香川県より流網漁業者を私共の手で渡航させた。その他ボルネオに折田氏が高知県より鯉漁業者を誘致し、セレベスでも大岩氏が鯉漁業を創めるなど、南方に於ける日本人漁業が漸次発展するようになった。

明治の末年私共がシンガポールに渡航してから十年位遅れ即ち大正初期に、シンガポールにいた漁業者が瓜哇（ジャワ）に渡航して、沖縄式の追込網を今のジャカルタ市を根拠地として始めたのが邦人漁業者がインドネシアに進出した最初と言って差支えない。沖縄式の追込網は、シンガポールに於いては既に経験済みで、相当な成績も挙げていたので、ジャカルタでも成績が挙がり、兩三年の間に三組となった。その後曳縄や流網漁業を試みたが余り面白い成績を挙げるまでに至らず中止した。当時はインドネシア人の漁業もすこぶる幼稚で、漁船に動力をつけたものは見られなかった位、皆、帆でやっていた。漁獲物の保

存や輸送に氷を使用する事すら知らなかった。我々が魚に氷を使用するのを見て、彼等が不思議に思った位であるから、魚の鮮度と言う事には全然無関心だった。鮮度に関心があったと言うばかりでなく、魚の腐敗しているのと新鮮なのとの味のく別さえ判らなかったといっても過言ではない。バタビヤとかバンドンの一流ホテルで出される魚がプンと臭いがして私共には口に入れる気にならなかった事が思い出される。それもその筈、漁師も、魚を売る魚屋にしても鮮魚は何時間位すれば腐るか、という知識を持ち合わせていなかった。私共も常に魚屋が腐った魚を売り歩いているのを見せられた。この事実は当時のバタビヤに於ける鮮魚の取扱方法を述べると最もよく判ると思う。即ち現地の漁業者が沖に出て行くのは毎日夕方から夜中迄で、港に帰って来るのが朝から正午迄。そして魚市場で魚の競売が開始されるのが、十時頃から二時頃迄で、競落した魚を小売商人が買って籠に入れて売り歩くのだが、殆ど氷も使用していないから夕食の食膳に供せられる時は既に完全に腐敗している。併し、我々としては同じ様な方法で魚を処理する事は漁業者としての良心が許さないで、氷を使用して魚を市場に持込むばかりでなく、彼等にも魚の鮮度を証明し、新鮮な魚の味覚に対する注意を喚起する事に努めたため、魚屋も漸次氷を使用して奥地に魚を送る様になり、魚の鮮度が自然魚価にも影響する様になってきた。スカブミからバンドン辺迄魚を送る様になり、販路も拡張された。

(中略)

当時はインドネシア人の生活程度も低く、魚価も廉かったわけで、一キロが三十セント位だった様に記憶している。そればかりではなく鮮魚の売れ行きも悪かったので、漁船を一隻入れてもそれを一日に売らずに大抵二日位に売っていた。こんな関係で現地の魚価にも非常に影響して大恐慌を来たしたものだ。我々としては、販路の拡張も計らなければ折角魚を取っても売れない計りか、あまり安いと引合わぬ事になるので、バンドンから、ガローあたりまで、魚を送る事を考えて馬來(マレー)から魚の販売に慣れている華僑を連れて来て、奥地への販路をやらせたり或は当時バンドン、ガロー中心としてバスの交通事業に成功していた佐藤茂氏を煩わして輸送して貰うなど種々の方法を講じた。

我々が最初瓜哇に渡航して漁業を始めるべく準備をしている際、当時の在留邦人の有力者から注意された言葉は今尚頭に残っている。「瓜哇は塩が専売制度で非常に高い関係もあり塩干魚にして売らねば鮮魚で売っては失敗するだろう」と、成る程考えられそうな事であるが、我々が塩干魚の売れる所は鮮魚が必ず売れると言う自信を持っていたばかりでなく、瓜哇や馬來は塩干魚を造るに仲々困難な事情があり、原価も相当高くなるので、鮮魚のまま売捌くに如くはないと思っていたから、そんな事には全然耳をかさずに専ら鮮魚の販路拡張と言うことのみ努力した。

東部の商業都市スラバヤにも漁船を廻航して鮮魚の販売に努力したが、市場の組織が悪くて売掛金の回収がうまく行かぬので、遂に断念してバタビアに引揚げた事もある。この様にして販路の拡張には相当苦勞もし、又犠牲も払って漸次鮮魚を認識して貰える様になり、又鮮魚の如何により魚価にも影響を持たせる様になってきた。過ぎ去って見れば何でもない様な事でも、最初の草分時代には後の人が想像も出来ない位の苦勞があったわけで、決して坦々たる道ばかりではなかった。

今は、遠くからビトンに思いを馳せる身ですが、再訪を企てたいとの考えは常時脳裏にあります。御地を訪れることができましたら、是非声を掛けさせて頂きますので、その節は宜しく願い申し上げます。

完

元空戦  
海軍第14期会  
広島護国神社  
海軍兵学校  
その他海軍関係者  
呉水交会  
関係御家族  
その他有志

各位

元海軍第14期飛行専修予備学生  
元山戦闘機隊

当直 大之木 英雄

インドネシア・北スラウエシ

### 最後の慰霊祭御案内

1987年10月15日、私たち海軍第14期飛行専修予備学生、元山戦闘機隊員一同の熱い志と、乏しい金によって、インドネシア国北スラウエシ州（旧セレベス島）ビトン市域、マネンボネンボ村に、主として堀内落下傘部隊の戦死者を弔う慰霊碑を建立して、今年は満20周年に当たります。

同期生も皆、満81才を超え、公式の慰霊祭行事を催すことが漸次困難になって参りました。

折しも以前より、今日あるを覚悟して、慰霊碑の今後の維持管理を如何にするかについては、何かと思案を重ねて参りましたが、幸い南スラウエシ州のマカッサル駐在の前日本総領事 渡辺奉勝氏、現総領事の後藤昭氏の大変な御配慮と、慰霊碑所在の北スラウエシ州ビトン市の日本人会の格別の御厚志により、同慰霊碑の維持管理について明るい見通しを持てるに至りました。

勿論、慰霊碑建立の時の北スラウエシ州政府との契約により、土地代並びに建設費は、すべて元山戦闘機隊が負担し、維持管理は北スラウエシ州政府観光局が行うことになって居りますので、北スラウエシ州政府に対しては、今年もかねて呢懇のサルンダヤン州知事、スワラン副知事を表敬訪問し、今後の維持管理について善処方、御願い申し上げる所存であります。インドネシア側と日本側の間に、時に意見の疎通の不充分を危惧されることもあり、上記、日本総領事館、並びに日本人会の御芳志を期待できることは、誠に有難い仕儀であります。

このような状況を勘案し、正式の慰霊祭は20周年の今年を最後とし、爾後は、有志の墓詣りという形に致したいと思っております。

本件は、元空戦の集い（元山戦闘機隊の同期会）国内大会、新年会の場で同期生の承認を得て居ります。

今年行います最後の公式慰霊行を、下記要領によって行いますので、今まで参加された方々、参加したことの無い方々、奮って御参加下さいますよう、心より御願い申し上げます。

関係者御本人は元より、奥様や御家族、又お知り合いの方々もどうぞ御一緒に御参加下さいますよう御願い申し上げます。



## 1. 慰霊碑建立及び今までの慰霊祭経緯

マネンボネンボの慰霊碑は、昭和 17 年（1942 年）1 月 11 日、北スラウエシ州のランゴアン飛行場に落下傘降下を行い、多数の戦死者をだした堀内落下傘部隊並びに南太平洋戦域で戦死した、陸、海将兵の御魂を祀ったものであります。

今回の慰霊行も従来通り、マネンボネンボ所在の上記慰霊碑前の慰霊祭が主たる行事であります。堀内落下傘部隊が、昭和 17 年 1 月 11 日落下傘降下した、ランゴアン飛行場跡（高原地帯）や、日本海軍の水上機の活躍したトンダノ湖の視察にも参ります。

又、マカッサル市に於いては、旧式の九七艦攻でアメリカのコンソリ B-24 の隊長機に体当り撃墜した木野中尉の慰霊や、B 級戦犯として無念の死をとげた人たちの卒塔婆慰霊祭も行います。

マネンボネンボの慰霊碑の建立は、14 期予備学の元山戦闘機隊の発意で行われたものであります。日本国 厚生労働省に、海外所在の旧日本軍の慰霊碑として正式登録されている他、

### A. 平成 4 年（1992 年）1 月 10 日（落下傘降下 50 周年慰霊祭）

- 堀内落下傘部隊の生存者
  - 海軍兵学校 78 期有志
  - 14 期元山戦闘機隊有志
- 計 110 名余

で、マネンボネンボの碑前で盛大な慰霊祭を挙行。之により旧帝国海軍の認知を受けました。

### B. 平成 10 年（1998 年）4 月 22 日

海軍第 14 期会公式行事として、14 期会本部より多数出席し、碑前で慰霊祭執行。

### C. 平成 15 年（2003 年）7 月 20 日

石川統幕議長（当時）並びに古庄海幕長（当時）の承認の下、日本国 海上自衛隊の練習艦隊 3 艦が、ビトン港に入港。マネンボネンボの碑前に於いて、海上自衛隊と元山戦闘機隊の合同慰霊祭を挙行。

之により海上自衛隊の認識を得ることができました。

### D. 平成 17 年（2005 年）6 月 15 日

広島護国神社、林禰宜及び後藤神官により神式により慰霊祭執行。

以上の通り、当マネンボネンボの慰霊碑は、日本政府、旧帝国海軍、海上自衛隊並びに海軍第 14 期会に於いて正式に認知された慰霊碑となって居ります。

更に、広島護国神社より正式に神事を戴いて居るのであります。

今回は、広島護国神社、藤本宮司の御厚志により、護国神社の神官、職員 3~4 名の参加が見込まれ、マネンボネンボ慰霊祭に於いて、碑前で巫女舞が献上されることになりました。

マルク海を見晴るかす丘の上で、蒼天の下、厳粛な神事が行われ、英霊も嘸、御喜びのことと思えます。

2. 帰途立寄りますバリ島は、既に御存知の如く、正に南海の楽園です。

有名なバリ舞踊など御覧になり乍ら、ゆっくりとくつろいで戴けると確信して居ります。

特にお天気の良い朝、ホテルの庭園で摂る朝食など素晴らしい雰囲気です。

ホテルには十分に気配りし、バリ島のインターコンチネンタルホテルの他、マカッサル、メナドに於いても当該地で最高のホテルを準備して居ります。

北スラウエシ州は、住民の多くがクリスチャンで温和な人柄です。堀内大佐の占領行政が抜群に良かったお陰で、メナド、ビトン、マネンボネンボー帯の対日感情は大変良好です。

風光も明媚なところで、メナドの沖合のブナケン島は、沖縄と並んでスキューバダイビングの世界的な名所になって居ります。メナドから海上フィリピンのダバオや、パラオ島は至近距離にあります。

東京方面の参加者の利便を考え、乗機地も、成田と関西空港の二つに致しました。殆ど同時刻にバリ島に着く予定です。

関西空港より 20名以上

成田空港より 15名以上

と、勝手に予定させて戴いて所要旅費を計算して居ります。

何卒、多数の御参加を心から御待ちして居ります。

### 3. 慰霊行事

#### (1) マカッサル市に於いて

7月2日

##### a. B級戦犯処刑者慰霊

テロー村のマリア・マカハベさんの庭にあるB級戦犯処刑者の卒塔婆37基、慰霊

7月2日

##### b. 日本海軍将兵墓参

バンティムルン村の農家の庭にある旧帝国海軍将兵の墓8基、慰霊

7月2日

##### c. 木野中尉慰霊碑、参拝

昭和18年9月、マカッサルにたった一機残っていた九七艦攻に搭乗し、来襲中のアメリカ コンソリ B-24 の隊長機に体当たり撃墜した木野中尉並びに、真鍋上飛曹の慰霊碑に参拝。

#### (2) メナドに於いて

7月4日

a. ビトン市域、マネンボネンボ村所在の慰霊碑前に於いて堀内落下傘部隊、その他南太平洋戦域の戦死者の慰霊祭執行。神式。巫女舞の献上。

・北スラウエシ州代表

・ビトン市代表

・マネンボネンボ村 村長

・ // 小学校校長

・ // 小学生児童 80~100名

・その他、地元民 参加

} 全員に日本から持参した  
記念品贈呈

7月4日

b. ランゴアン飛行場跡

トンダノ湖、戦跡慰霊

マネンボネンボ慰霊祭終了後、専用バスにて山を登り、堀内部隊が落下傘降下したランゴアン飛行場跡にて慰霊。

又、日本海軍の水上機が兵器弾薬輸送に活躍したトンダノ湖視察。

7月3日

c. ビトン市 日本人墓地参拝

ビトン日本人会が、先年整備された日本人墓地に参拝。

4. その他の主な行事

(1) 7月2日

マカッサル日本人総領事館に後藤総領事、表敬訪問（一部代表）

夜、後藤総領事夫妻、領事館員と当方参加者全員の会食

(2) 7月4日

メナドの謝恩パーティー

慰霊碑建立 20 周年記念パーティー 於：メナド リッチーホテル

招待者 : 北スラウエシ州知事夫妻

北スラウエシ州副知事夫妻

北スラウエシ州観光局長

ビトン市長夫妻

マネンボネンボ村長

マネンボネンボ前村長

マネンボネンボ小学校長

関係警察署長

慰霊碑、所在土地提供の地主（カウナン氏）

1987 年慰霊祭に参加した小学生（当時）80 名

メナドの旅行社 PANDU の幹部

その他、御世話戴いた方

(註) 謝恩パーティーの費用は、元山戦闘機隊の「北スラウエシ州慰霊碑基金」から支出致します。

5. 行程（別紙、ご旅行日程表参照）

(1) 出発 平成 19 年 7 月 1 日

{ 関西空港  
成田空港

帰着 平成 19 年 7 月 8 日 朝

{ 関西空港  
成田空港

(2) a. 関空、或いは成田よりガルーダ・インドネシア航空（国営）にて、バリ島デンパサール空港へ。（所要時間 6～7 時間）

同夜、バリ島 泊（インターコンチネンタル・ホテル）

b. 翌7月2日、ガルーダ航空の朝便にてバリ島よりマカッサル（ウジュンパンダン）へ。

10:10 マカッサル着  
各地、慰霊

12:00 ホテル（ゴールドデン・マカッサル・ホテル）へチェックイン。  
午後、代表が日本総領事館へ表敬訪問。（他の方はホテルで休憩）  
夜、総領事他と会食（全員）

（註）マカッサル（オランダ名）は又、ウジュンパンダン（インドネシア名）とも云います。

c. 7月3日 11:00

ガルーダ航空で、マカッサルからメナドへ。代表は、州政府表敬訪問及び日本人墓地、日本人会へ。他の方はホテル（リッチー・ホテル）で休憩。

d. 7月4日

09:00 ホテル出発。マネンボネンボに向う。  
10:00 マネンボネンボ慰霊祭  
11:00～15:00 ランゴアン、トンダノ湖等、戦跡視察  
夜 リッチーホテルで謝恩パーティー

e. 7月5日 メナド → バリ島（デンパサール空港）  
ホテル インターコンチネンタル

f. 7月6日 バリ島観光

夜 日本レストラン（“祭”）にてお別れパーティー

g. 7月7日 18:00 頃迄 自由行動  
（ホテルは18:00迄利用できます。）

夕食 バリ舞踊見物  
深夜便にて帰国

h. 7月8日

朝、関空或いは成田着

## 6. 旅費（見積書参照）

関空発 御一人 261,000円（20名以上）

成田発 御一人 278,000円（15名以上）

計入されている費用

航空運賃、ホテル代  
朝食 全部  
昼食2食は自弁、その他全部  
夕食 1食は自弁、その他全部  
その他見積書参照

（註）上記、自弁の食費、各食事のアルコールや飲料、その他、チーム全体で支払う経費に当てる為、共通経費として各人より若干金額を徴収し、定められた会計責任者が一括して支払、後日決算報告を行う。

平成 19 年 5 月 24 日

北スラウエン慰霊祭参加者各位

元空戦の集い  
当直将校 大之木 英雄

(第 2 回 ご案内)

平成 19 年度 インドネシア 北スラウエシ州

マネンボネンボ他 慰霊祭

拝啓 新緑の候、御清昌御慶び申し上げます。  
このたびは、頭記慰霊祭にご参加戴き、厚く御礼申し上げます。  
本日、第 2 回のご案内をお送り致します。

1. 参加者

1	磯辺 幸雄	(飛予 14 期 元空戦)
2	菅 孝夫	(飛予 14 期 元空戦)
3	藤村 邦正	(飛予 14 期 元空戦)
4	大之木英雄	(飛予 14 期 元空戦)
5	若山 正治	(兵学校 73 期)
6	田村 潤二	(兵学校 75 期)
7	林 友昭	(広島護国神社 禰宜)
8	村田 賢次	(広島護国神社 神官)
9	大之木雄次郎	(大之木建設社長 英雄の甥)
10	母里 義男	(飛予 14 期) ※現地参加
11	小田 典子	(元山空遺族)
12	久野 万里子	(元山空遺族)
13	田賀谷久美子	(元山空遺族)
14	米津 昌子	(元山空遺族)
15	大本 訓子	(広島護国神社 職員)
16	岡山 雅子	(大之木美智子 友人)
17	大之木明美	(雄次郎夫人)
18	大之木美智子	(英雄夫人)
19	添乗員 嘉本 俊介	

計 19 名

## インドネシアの思い出

2007/5/19

川口 博康

### ① インドネシアに初めての上陸

私がインドネシアに始めて上陸したのは23歳の時でした。  
以下にその顛末を記してみます。

学校を卒業し海技免状を取る事ができ3年後始めて船長としてまぐろ船に乗船しました。当時は高度成長期の真最中、すべての漁船は遠洋漁業を目指しました。船長や機関長・無線長といった法定職員は引っぱりだこでした。当時のまぐろ船は漁労長が全てを仕切っています、同期の目標は30歳で船頭＝漁労長になることでした。船長はその前段階です。

ジャワ海でまぐろ延縄を行い、満船帰途に着きました。  
乗船していたまぐろ船の使える航海計器はロランAだけでした。赤道付近ではこのロランAは殆ど使えません。夕方の天測で船位を確認し、一刻も早く帰りたい思いから最短コースであるアロール海峡に進みました。  
灯台も無い真っ暗な闇夜の中を推測航法だけで海峡を通過しようとしたわけです。  
もう少しのところに来た時、ザザーと船底がサンゴ礁に触れて座礁してしまいました。船体を受けるショックは大きくなかった事から無事操業が終わり入港を楽しみに殆どの船員は寝ていました。起きてきたのは2～3名でした。  
まずは状況確認をしました。すごい潮の流れのなかにありました。このような潮の流れは想定外でした。完全に私の経験不測からコースの選定間違いです。  
私のショックは大きく動転しました。

真っ暗闇の中でサーチライトに照らし出されたのはふんどしだけの現地の男たちの姿です。よく見ると手に持っているのは銃です。この時、脳裏をかすめたのは「襲われるのではないか」という事です。座礁以上のショックが船内を包みました。  
この姿を見た私は「人食い人種」の発想しかできませんでした。会社に何と行って無線を打とうか。彼らが襲ってきたら狭い船内では逃げ場も無い。誰も口には出さなかったもののえらいことになったと感じていた事は確かです。  
一瞬、座礁したことはどこかに飛んでいきました。

恐怖の一夜が更けていく中で陸の人たちの数は一段と大勢になっています。  
この人だかりに船内は静まり返っていました。

